
ルワーズ公国異才伝～不死騎外伝～

槇原勇一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルウィズ公国異才伝〜不死騎外伝〜

【Nコード】

N6213L

【作者名】

槇原勇一郎

【あらすじ】

フリップ王国とインテグラ王国、二つの王国から別々に臣従するルウィズ公国。その特殊な位置づけの国家は未曾有の危機を迎えながら、僅か数十年の間に大きく飛躍を遂げる。本作はそうした「ルウィズ独立公国」の発展を支えた英雄たちの足跡を伝えるものである。

ルウィズ公国を舞台とする対吸血鬼の戦争を描く「不死騎」の外伝的な話を収めました。

本編『不死鬼』(http://ncode.syosetu.com/n0774k/)もよろしくお願いします。

公国の至宝（ウィレムとシルヴィアその1）（前書き）

女性ながら公国有数の伯爵家を相続したシルヴィア・ファン・フェルメール。

護国騎士団第一部隊副隊長ウィレム・ファン・バステン。

ルワーズ公国でも異才を放つ二人の出会いを中心に『不死騎』のプロローグにあたる『ルワーズ公位継承戦』『吸血鬼掃討戦』について語る。

公国の至宝（ウィレムとシルヴィアその1）

「ファン・フェルメル伯爵家当主！シルヴィア殿」

ルワーズ公国筆頭侯爵にして政府の首班たる國務卿を勤めるテオ・ファン・ダルファー侯爵の邸宅にある大広間。この日のパーティに招かれたゲストは一人一人が入り口に立つ度にその名が呼ばれた。入ってきたのは、まだ二十歳そこその若い貴婦人である。真紅のドレスを纏い、優雅な足取りで花道を歩む姿は堂々たるものであった。

シルヴィア・ファン・フェルメル。ルワーズ公国でもきわめて珍しい伯爵家の女性当主である。二年前、十九歳で父親が急死した。ファン・フェルメル本家には男児がなく、分家の次男である甥のアントンへの継承が検討されたが、父親の遺言には女性であるシルヴィアへの継承を希望する旨が記載されていたため、公国有数の伯爵家に女性当主が誕生したのである。女性に対して名前の後ろに爵位をつけて呼ぶ慣習はないため、『伯爵家当主』の肩書きの後ろにファーストネームを呼ばれる形となっていた。

続けて呼ばれたのは、ホストであるテオ・ファン・ダルファーの下で國務府の首席参事官を務める男だった。

「國務府主席参事官！ベルト・ファン・レオニー伯爵！」

背のあまり高くない、四十前の貴族はファン・フェルメル家と並び名門伯爵家の出である。しかし、名門とは言え、ファン・レオニー家はここ数十年の間で『没落貴族』の烙印が押されていた。ベルトの父親は浪費家で、政府や軍に役職を得ることも、自分で事業を

起こすようなことも、資産を運用して蓄財に勤しむこともしなかった。浪費にもいろいろあるが、彼の場合はそのほとんどを女に費やしていた。ベルトの母が若くして亡くなった後、後妻をもうけることはせず、代わりにあちこちに愛人を作ったのである。

元々ファン・レオニー家は家格は良くとも潤沢な資産を持っていたわけではない。どうか並みの伯爵家としての体裁を整えていたに過ぎなかったのが、ベルトの父は気前良く多くもない資産を愛人たちにばら撒いた。ベルトが成人してまもなく父親が亡くなった時には、莫大な借金と、ありもしない遺産の継承権を主張する愛人たちだけが残っていた。

ベルト・ファン・レオニーはそんな境遇から身を起こした男であった。単に伝統があるだけの伯爵位を得ると同時に、父親の多大な借金を負わされたところからのスタートだったが、彼には父親にはない才能があった。政治と外交に関するセンスである。成人してすぐに国務府に勤めることになる。名門貴族の出であれば、無条件に出世コースには乗るが、と言っても、ある程度以上上り詰めるには時間もかかるし、高位の役職を得られる人数は限られている。ベルトは最初の十年の間は辺境の役所の管理職や都市卿を勤め、三十を数えるころには、ドルテレヒト州の州卿となり、ステーン湖畔の開発事業で実績を上げた。それが認められ、三十代前半という異例の若さで国務府の参事官に就任、二年前には主席参事官に上り詰めた。前例のない出世である。主席参事官の俸禄は高額であり、それによって父親の借金をどうにか完済することができたのである。

だが、それは同時にこのパーティの主催者たるテオ・ファン・ダルファーに危険視される理由ともなった。本来は国務卿の懐刀であるはずの主席参事官の地位にありながら、テオから遠ざけられたファン・レオニーはそれを悔しく思いながらも、自分のやるべき仕事は

淡々とこなしていったのである。

「軍務卿！フリーゴ・ファン・ドースブルフ伯爵！」

「護国騎士団長！トーマス・ファン・ピケ伯爵！」

「ドルテレヒト州自治領主！アンドレ・ファン・ハルス伯爵！」

「保安兵団長！パウル・ファン・ハウテン侯爵！」

次々と名を呼ばれるのは伯爵以上の爵位を持つ者だけである。子爵位以下の貴族は彼らの連れとしてしか参加できないのだ。

すべてのゲストが会場に現れた後、テオ・ファン・ダルファーの挨拶でパーティは始まった。フリップ風の豪華な食事と直接輸入した名高いワイン、宮廷楽士と同レベルの評価を受けている専属楽士たちの奏でる音楽、馬鹿らしいほど巨大できらびやかなシャンデリア・・シルヴィアにはその一つ一つがこの国の病魔のように思われた。

七年前、国公ジョージ・ルワーズは自分の後継者に長男ジェローンを指名した。本来であれば何の問題もないことである。君主である国公自身が長子を次代の国公に定めだけに過ぎないのだから。しかし、ルワーズ公国においては事情が違った。ルワーズ公爵は隣接するフリップ王国、インテグラ王国の双方から封ぜられている。その位にある者は世代ごとに両国の王家から公妃を娶り、後継者は結果として両国の王家の血を常に受け継いでいる必要があったのである。

今年十三歳のジェローンの母親は両国王家の者ではなく、公国内の弱小貴族であるファン・ゴツホ家の出身であった。正式な公妃ではなく、愛人でしかない。にもかかわらずジョージがジェローンを指名した理由は、他に継承権持つ者が実はいなかったからである。ジェローンには姉が独りいるが、少なくともその姉の母、すでに亡くなったジョージの正式な公妃の出身であるフリップ王国では公爵位

の女性継承権を認めてはいない。

この七年間は、両王国はルワーズの状況を様子見していた。結局はジョージの死後の話である。ジョージがいくら後継者を指名しようとして、死後に意見を述べることはできない。インテグラ王国やフリッツ王国の意向で決まることであり、ルワーズの廷臣はそれを受け入れるしかないのだが、両国が統一した見解を出せなければ、ルワーズを舞台にして戦争を始めることになる。両国の妥協によりルワーズ公国が誕生するまでは百年の戦争を要した。公国の民に対する責任を果たすためには、両王国が納得の行く形を模索しなければならぬが、公国政府の首脳部はその時が来るまで何も考える気がないらしい。

女性であるがゆえに政府機関に勤めてはいないが、シルヴァアは聡明で政治、経済への関心が高く、並みの政治家などは歯が立たないほどの論客でもあった。最初は面白がって、若い女性伯爵に問答を吹っかけた政府の高官たちも最近は話しかけてくることすらない。問答の結果、社交界での自分の名を貶めることになるからである。

今もそうである。若い貴族、まだ爵位を継承せずに一時的な男爵位や子爵位が与えられている若君たちが軽薄な言葉で気を惹こうとしたり、ダンスに誘おうとしたりはするのを適当にあしらっただけであった。

「シルヴィア様！相変わらずツンツンされておいでですね」

話しかけてきたのはシルヴィアよりもさらに若い、まだ十代の娘である。シルヴィアよりは幾分地味なドレスを纏っているが、背が高くほっそりとした体格でありながら、どこか凛として筋の通った美人であった。

「あら、カリスさん。貴女の方はおめがねにかなう殿方を見つけられたのかしら？」

「せっかくお連れいただいたのに残念ですけど、貴族の若様じゃ私と釣り合いがとれませんわ」

「そうね。お坊ちゃん方には貴女は持ったないわ」

カリス・クリステル。公国首都アメルダムにおける商取引の半分を取り仕切っているとされる事業組合クリステル財団の創立者の娘である。クリステル家は貴族ではないが、カリスの父は単に商業での成功を収めたのみならず、ここ数十年のルワーズ公国の経済発展を支え、私財を投じて市民生活の向上に努めた慈善家であり、その名声はきわめて高い。

現国公ジョージ・ルワーズは開明的な名君であるため、国内では開明派の勢力が強く、近年では貴族と上流階級の平民との社会的地位の差は縮まってきている。テオ・ファン・ダルファーなどの公国政府の中枢にある者はまだまだ平民が政府中枢や宮廷に入り込むことに対し抵抗感があるが、ゲストの連れとしてであれば、こうしたパーティーに出入りすることも可能となって来た。シルヴィアは気乗りのしないパーティーの気休めに、年少の友人であるカリスをつれてきたのである。

ファン・フェルメール家は格式としてはファン・レオニー家とならぶ名門であり、資産としては筆頭侯爵家のファン・ダルファー家に次ぐ。クリステル財団の貿易部門にとっては、大のお得意様であり、また、シルヴィアの代になってからは、福祉部門や医療部門への出資者ともなっている。クリステル家とは浅からぬ関係があった。カリスの父から紹介されて以来、二人は親友であった。

「そういえば、医学院の方はどう？」

カリスはこの春、公国一の医師養成機関である公国医学院に入学している。軍事面に国費を過大に投じることは宗主国であるフリップ、インテグラの両国を刺激することになるため、その分、医療や教育の分野の政策が充実しているのがルワーズ公国の特徴であった。優秀な医師を輩出する近隣最大の教育機関である公国医学院はある意味では国家の象徴をなす組織の一つであった。

「ま、まずまずというところですね。こちら名門とまでは行かないとも貴族の若様が多くて、あんまり興味が持てそうもないから勉強に集中できそうですわ」

「あら」

「ところで、少し前に私に妹ができましたの」

「え？」

カリスの父親は大事業家の割には私生活は潔癖症で、カリスの母親が亡くなったあとも、新しく女を作るようなタイプではない。

「ああ、義理のですけどね。孤児院から引き取ったのです。私が医学院で忙しくなって、家を空けることが増えたものだから、お父様はずいぶん寂しがって・・・サスキアって言いますの。とっても利発でかわいい娘ですね。是非、ご紹介させてくださいね」

二人は壁の花となって、おしゃべりを続けていた。ダンスになど誘われたくもないので、できるだけ隅っこの方にいるのだが、どうしても二人は目を惹いてしまう。男性たちからの視線をうつとうしく思ったシルヴィアはカリスをバルコニーに誘った。カリスはウェイターからグラスとワイン、少しの料理を受け取り、夜風に当たりながら話をするために二人は移動した。

「失礼ですがだいぶ酔っておられるようですね。空いているお部屋もございませうので、少しお休みになつてはいかがですか？」

バルコニーに出ると少し野太い、バスの効いた声で話している男の聲が耳に入ってきた。それに先立って、グラスか瓶が割れる音も聞こえている。

「ああんだあっ！？警備兵風情が俺に意見でもする気がっ！すっこんでろっ！」

良く見てみれば、泥酔したどこかの貴族の若君が警備の者に絡んでいる。が、警備兵とは言つてもその男は体格の良い偉丈夫で、制服からすると護国騎士団の指揮官クラスであるように思われる。今日のパーティーはテオ・ファン・ダルファーの個人的な祝い事ではあるのだが、國務卿主催ともなれば、多くの要人がゲストとして招かれるため、国軍の主力部隊である護国騎士団から警備の者が派遣されている。

「まあ、私は確かに警備兵風情ではございますが、あまり騒がれましては他のゲストのご迷惑になりますし、泥酔して暴れたなどと言うことになりますと、貴方様の家名にも傷が付きましょう。さ、部屋にお送りいたしますので・・・」

言葉は丁寧ではあるが決して卑屈には思われない。この護国騎士団の男の堂々とした態度にシルヴィアとカリスは感心したが、逆に泥酔しているのを咎められた貴族の若君は苛立ちを覚えたようである。

「迷惑だっ！たかだか警備兵が俺を迷惑が・・・はっ！・・・は

っ！・・・は・・・こ、この野郎ッ！」

もはや呂律が回らなくなっているらしい男は、貴族にしては礼節も気品もない言葉を噛みながら吐いて腰の剣を抜いた。剣といっても儀礼用の、というよりは装飾品で、実用性に乏しい煌びやかなだけの道具だが、それでも、切り付けられれば怪我をする。

「マルコ・ファン・ピケ卿っ！おやめなさいっ！」

思わずシルヴィアは叫んだ。泥酔してい若者は顔見知りであった。目の前の男が所属する護国騎士団の長、トーマス・ファン・ピケの長男マルコ・ファン・ピケである。シルヴィアと同年輩ではあるが、国軍で重要な地位を占める父親には倣わず、かといって政治に参加するでもなく、お高く済ました芸術家気取りで社交界に浮名を広めるだけの軽薄な貴公子である。人柄もこのとおりあまり良くない。シルヴィアが軽蔑する貴族の代表格であった。

シルヴィアが叫んだにもかかわらず、マルコはそのまま、おそらくはほとんど切れ味のない、裝飾過剰な鈍器を警備兵に叩き付けた。

「っ・・・!!」

シルヴィアとカリスは思わず目をつぶってしまった。恐る恐る目を開けたときに見えた光景は意外なものであった。

「は・・・離せっ！」

「離せと言われましても、貴方はすでにこの会場にあつてはゲストではなく暴漢。できるだけ穏便に済ませたいとは思いますが、そのためにはまずは落ち着いていただかないとね」

警備兵は叩きつけられた剣を交わして、マルコの手首をつかみ、捻りあげて身動きを取れなくしてしまったのである。

「うるせえっ！親父に言いつけてやるぞっ！」

情けない台詞を吐くマルコにため息を付きながら、シルヴィアは進み出た。

「マルコ卿！どう見ても貴方に非があります。穩便に取り計らっていただけるとのことなので、おとなしく部屋で酔いを醒ましなさいっ！お父上に言いつけるのは貴方ではなく私ですっ！」

今までまったく気づいていなかったマルコはシルヴィアを見てビクリとする。だが……。

「う、うるせえっ！このアバヅレめっ！女だてらに偉そうな口利きや……ひ、ひっ」

警備の男が捻りあげている腕に力を入れた。

「ご婦人に対してその態度、頭蓋骨に蜂蜜とヨーグルトが詰まっている夢見がちなご令嬢にはモテても、本当のいい女には相手にももらえませんな。そちらのご婦人のような」

「けっ！お、おお……いっ……痛いっ！俺がこんな女に……うっ……えっ……やっ、やめっ……！」

警備兵は右手でマルコの腕を捻り上げたまま、左手でベルトを掴み、体ごと持ち上げた。

「ゲストに対する無礼を働いたとなればもはや救いようがありません

んな。少し頭を冷やされた方がいいでしょう。男ぶりもあがりませよ」

ひょいっという感じで男をバルコニーから外に放り投げた。バルコニーは二階にあるが下には大きな池がある。ドボンっ！という音が少ししてから聞こえてきた。

「ご不快な思いをさせて申し訳ありません。ええと・・・」

「私はシルヴィア・ファン・フェルメール。こちらは私の友人でカリス・クリステルとです」

「ほう・・・これは大変失礼いたしました。ご高名伺っております」「こちらもお名前を伺ってもよろしいかしら？」

男は少しだけバツの悪い表情を浮かべてから、見事な敬礼と共に名乗った。

「護国騎士団第一部隊副隊長ウィレム・ファン・バステンと申しませよ」

「なるほど。お会いするのは初めてですが、若くして副隊長に昇進された男爵位の武人がいらっしゃると言うつわさは耳にしたことがございますわ。ところで・・・」

「は、いかがいたしましたか？シルヴィア殿？」

別に怪訝そうな顔はしない。ざっくばらんなようすでいて、決して相手に不快感を与えるような態度ではない。ウィレムという男は不思議な雰囲気を持っているように感じた。

「今回のなさりよう、道理に外れることはありませんが、何分相手は権門の家柄で、貴方の上司に当たる方のご子息、後日、問題になるのでは？」

「まあ、そうでしょうか・・・あ、それでは、失礼いたしました、とりあえず、下の様子を見てまいります」

「私達も参りましょう。どうせ、パーティーには飽き飽きしていたところですよ」

一階に下りて、庭に出ると人だかりができていた。ウィレムの年長の部下が池に飛び込んでマルコを助けたいらしい。すっかり酔いはさめたようだが、もう絡み酒をする元気もないようであった。

「マルコよ・・・どうしたことだ？ いったい何があった？」

「そ、その・・・その警備兵が私をバルコニーから突き落としましたですよっ!」

ウィレムを指差しながらマルコは父親であるトーマス・ファン・ピケ將軍に告げ口をする。

「ウィレム副隊長。マルコの言うことは本当か？」

ファン・ピケは別に怒るでもなく、単に確認といった風でウィレムに問いかける。

「正確には、突き落とされたのではなく、放り投げたのですが概ねそのとおりですよ」

別にふざけた口調ではない。ウィレムも単に報告といった風でこのように言う。

「で、どのようないきさつでそうなった？」

「それについては、私が証言させていただきますわ。ファン・ピケ騎士団長」

シルヴィアがウィレムを押しよけての前に出てきた。

「ほう。シルヴィア・ファン・フェルメール殿。現場に立ち会っておられたのですな」

「ええ。私がバルコニーに出たときには、マルコ卿は泥酔してそちらのファン・バステン卿にしつこく絡んでおいででした。ファン・バステン卿は彼を休憩室にお連れしようとしていたのですが、マルコ卿が酔いに任せて剣を抜いたため、仕方なく応戦の上、バルコニーから池に落とすことになってしまったのです」

シルヴィアはあえて詳細を省いた。実際には酔って剣を抜いただけでなく、シルヴィアに対する暴言もあった。これを口にすればファン・ピケ家はファン・フェルメール家に対して著しく立場を悪くする。馬鹿息子のために苦労させるにはトーマス・ファン・ピケは惜しい人物であった。もちろん、取り押さえることに成功した上で、その暴言をきっかけにウィレムが余裕を持ってマルコを放り投げたとなれば、ウィレムの行為は正当防衛の範疇を超える。

「なるほど。それでいいかな？ファン・バステン副隊長？」

「はあ。結構でございます」

少々、自分が考えていたのと違う成り行きであったので、きよとんとした表情で答える。

ファン・ピケはくすりと笑ってから、マルコに目を向けて言った。

「愚息が大変迷惑をかけた。これは私の監督不行き届きだ。どうや

らシルヴィア殿にもご迷惑をおかけしたようですな。後日、改めて謝罪させていただきたい。今日はこの馬鹿者を連れてかいらねばなりませんので。ファン・バステン副隊長、あとはよろしく頼む」

「はっ！任務に戻ります」

ウィレムは悪びれず、正式な敬礼をして上司とその息子を見送った。

「それでは、シルヴィア殿、警備に戻らねばなりませんので、私はここで失礼いたします。どうかパーティをお楽しみください」

「そうですね。ちなみにどこが貴方の担当なのですか？」

「先ほどのバルコニーになります。そこで中庭にいる部下たちを監督するのが私の仕事になりますので」

「私達もあのバルコニーで過ごそうと考えておりました。お酒を召し上がるわけにはいかないでしょうが、仕事のついでに、私たちと少しお話をしていただけませんかしら？」

カリスは意外そうな顔をしてシルヴィアを眺めた。シルヴィアはマルコのような軽薄な貴公子は嫌いだがそれ以上に汗臭い武人は嫌いなはずである。だが、どう見てもシルヴィアはこのウィレムと言う男に興味を持ったようだった。

公国の至宝、ウィレムとシルヴィアその2

ウィレムは多少困惑していた。

先刻マルコを池に向かって放り投げたバルコニーに戻り、庭に展開している部下たちを監督しなければならないのだが、妙な成り行きで関わりあった二人のうら若い女性が、わざわざ彼の近くにテーブルセットを置いて話しを始めたのだ。

二人とも美人である。ウィレムはまだ二十台半ばの若さだが、人並み以上に女性経験を積んでいる。美人とお近づきになることは望むところなのだが、今は仕事である。何より、名門伯爵家の女性継承者と親しくなるなど想像したこともなかった。

「ファン・バステン副隊長。あ、仕事の邪魔ならおっしゃってくださいね」

「いえ、部下たちの配置を確認するだけのことで。特に異常がない限り、お話し相手ぐらいは勤めることはできますよ」

「そうですね。ところで、先ほどは少々差し出がましいことをしたのかもしれませんが、私が何も言わなければあなたはどのようにある場を乗り切るおつもりだったのかしら？」

先刻のマルコを池に放り込んだ件である。シルヴィアの説明がなければ、上司たる護国騎士団長の子息に対する暴行の罪に問われたかもしれない。

「ファン・ピケ將軍は器の大きな武人です。それに実を言うと事前に内々に依頼されていたことがあります」

「内々の依頼？」

「將軍はご子息の素行についてご心配されておいでで、パーティの席で酒癖の悪さが出たならば、目立たぬように空き部屋にでも連れていくようにと」

「あら、意外とファン・ピケ伯も過保護なことですね」

「だいぶ手を焼いておられるようでして。少々気の毒に思われますな」

「そんなことをお願いされてるとは、ずいぶんと信頼されておいでのですね」

「將軍の器の大きさでしょう。できるだけ穏便に済まそうとは考えてはいますが、埒が明かないときは多少は荒療治を私がすることぐらひはご理解いただけていますはずですので」

シルヴィアは魅力的な微笑を浮かべてウィレムの冗談とも言い切れない話に答えた。

「大胆なことですね」

「怖いもの知らずなだけですよ」

カリスはあまり会話には参加しなかった。まだ酒を呑み慣れていないので、軽く酔い初めて来たのと、何より年長の二人の会話に割り込むことは難しいように思えたのである。かと言って、居心地が悪いと言っわけでもない。二人は無言でカリスがその場にいることに許可を与えているようであった。

最初は少々困った様子を見せていたウィレムも、いつの間にかシルヴィアとの会話を楽しんでいる。相性がいいというのだろうか、シルヴィアの知性はやや尖りがちなところがあり、会話には微量ながら相手を怯ませる要素が含まれていることが多い。しかし、おそらくは本人も気づいていないように思われるが、ウィレムに対してはそうした棘が感じられない。あるいはその棘の存在が感じられない

ほどに、ウィレムと言う男にはシルヴィアの皮肉を受け流す程度の余裕を持ち合わせているのかもしれない。

「ところで、本日のパーティ、ファン・バステン卿はどう思われますか？」

「と言いますと？」

「国公陛下のお体は切羽詰った状態ではないにせよ、必ずしも思わしくありません。そして、我が国を取り巻く状況も樂觀できるものではありません」

「ふむ……」

ウィレムはあごに手を当てて少しだけ考え込んだ様子であった。

「あまり大きな声では申せませんが……たしかに少々危機感が足りないようには思われますな。あるいは一種の現実逃避なのかもしれませんね」

「逃げたところで、現実と言うものは無視できるものではありませんわ」

「おっしゃるとおりで」

それ以上はお互いにこの話題を広げることはやめた。不穏な内容に話が進んでしまいそうな気がしたからである。そうした話はまた後日ゆつくりとできるのではないかと、理由もなくお互いに理解したかのようであった。

「ウィレム副隊長はあまり家柄の良し悪しということには気にされないようですね？」

「はは、公国有数の伯爵家の当主たるシルヴィア殿にそう指摘されては少々自重が必要かもしれませんな」

「何か理由はありますか？」

ウィレムは立つたまま話をしている。警備の仕事中的であるのだから当然であって、話ながらも周囲への警戒は解いていない。シルヴィアもそうした彼の様子をちゃんと感じ取っているようであった。

「まあ、我が国は近隣でも開明的な社会風土を持っておりませんが、そもそも二つの宗主国を仰ぐ国。そんな国の中で権門を誇るなどと言うのは、何か田舎のガキ大将のような幼稚さを感じるというだけです。いや、これこそシルヴィア殿の前で口にする事ではないかもしれません」

「そんなことはありません。別に私はファン・フェルメール家の名跡など大して大事にしておりませんから。父の遺言に対して義理を果たしているにすぎません。なかなか面白い見識としますわ」

「と言つても、考え自体は私のものですが、この言い回しは受け売りです」

「あら、どなたの？」

「私の弟です。腹違いではありますが・・・」

シルヴィアもカリスもこの一言に興味を持った。こんな男に弟がいるとすればどんな人物であろう。

「私と十も離れておりますのでまだまだ子供ですが、武器を持たせても素手でも手癖足癖の悪さは私と同程度、悪知恵の働くことは私以上、性格の悪さでは比べ物になりません」

「その弟さんが先ほどのようなお考えを？」

「ええ。武人にも政治家にもなる気はないというのに、こういふ話になるとさかしげに生意気な口をきく奴でしてね」

「あら、そんな優秀な弟さんは何になるおつもりなのかしら？」

「医者になりたいと言ってますね。その割には公国医学院への推薦を取り付けようとすると必要ないと意地をはるのですが」

「あら、こちらのカリスは今年医学院に入学したばかりですよ」
「ほう……」

二人の会話はまだまだ続きそうではあったが、パーティはそろそろ終わりに近づいていた。多少名残惜しそうに、シルヴィアは別れの挨拶をする。

「それでは、失礼しますわ。ファン・バステン卿。おかげさまで大変楽しい夜でした。機会があればお食事でもご一緒させていただけますかしら？」

「私などでよければいつでもお付き合いいたしますよ。こちらこそ、暇な仕事でも有意義な時間を過ごせました」

そう言つて、初対面の二人は互いに別れを告げたのであるが、それは本当にこの晩だけのことであった。

翌日、ウィレムは非番であった。平時の勤務時間外に警備に借り出されていたので、翌日は休みを取ることができる。トーマス・ファン・ピケは部下に超過勤務をさせることを嫌う男で、こうした気遣いは結構しっかりしている。

非番の日のウィレムは自堕落そのもので、目を覚ましたのは正午直前、それもファン・バステン家の執事に起こされたのであった。前日は遅くまでの警備が終わったあとで、さらに部下と歓楽街で飲み騒いでいたのだから無理もない。護国騎士団一の酒豪と呼ばれ、武技も指揮能力も水準以上であるが、素行についてはあまり評価を得ていなかった。

軽い二日酔いであった。執事から厚いタオルを受け取り顔をぬぐつ

て冷水を口にした。

「・・・つつ・・・また呑みすぎたか・・・ヤンは？」

「ヤン様は早朝に武術の稽古をお一人でなされたあとは、書齋に籠つておられます」

今年十五歳のヤンは複雑な年頃らしい。そもそもが、ウィレムの父親がメイドに生ませた子である。ウィレムの母親が亡くなり、ファン・バステン家で引き取るまでは、ずいぶんと苦勞をしていた。多少ひねくれてもしかたない。

ウィレムの母も、ヤンの母も、そして三年ほど前には二人の父親も同じ病で命を落としている。周辺諸国で猛威を奮った伝染性の熱病、スperlファ熱である。昨年、ある男の手によって治療法が確立されるまで、毎年多数の死者を出したこの病をきっかけに、公国政府は国立の医療研究機関、公国中央医局を開局し、周辺諸国でも飛びぬけた医療技術を誇るようになった。医学院とならぶルワーズ公国の医療政策の象徴的存在である。ウィレムとしてはヤンが望めば、公国医学院に入れて、いずれは中央医局の研究員にでもなればいいのと考えているのだが、本人には違う考えがあるようであった。

反抗期のヤンはできるだけ兄と顔をあわせないようにしているようだが、屋敷には兄弟と初老の執事が一人、中年のメイドが二人だけしかない。ファン・バステン家で引き取ったあとは、公立の教育機関である学塾にも通わず、屋敷の中で一人で勉学に励んでいるヤンにはあまり友人もない。心配ではあるのだが、一方で、極度に理屈っぽい性格であることから、同年代の子供に混じっても浮いてしまうことも間違いなさそうであった。

ウィレムとしては、いつもつつけんどんな物言いのヤンの武技の稽

古にだけは無理やり付き合うようにしていた。本人はぶつぶつ文句を言いながらも、決してウイレムを嫌っているわけではなく、兄の気遣いには内心感謝をしているようではあった。だが、休日のたびに二日酔いになる十歳年上の兄にたいして、この点だけは見習う気はないようであった。

「ところで、フリップ王国の方から参られたと言うメディサラ商人が今朝がお手紙を届けてまいりました。マウリッツ・スタンジエと言う方からのものです。こちらになります」

マウリッツ・スタンジエはウイレムの幼馴染である。貴族と平民という違いはあるが、スタンジエ家はゼーラント、ドルテレヒトと並んで『フリップ側国境三州』の一角を占めるクラーメル州の豪農の一族であった。マウリッツは高い水準の教育を受けられる学塾に通うために、アメルダムの親類の家に居候していた時期がある。ウイレムとは学塾の同窓生であった。

ここ数年ほど、音信が途絶えてはいたが、その理由はわかっていた。一年前、スペルファ熱の治療法を確立した男こそ、流浪の名医ヨアヒム・カイパー博士の元で医療を学んだマウリッツ・スタンジエだったのである。放浪癖のあるカイパー博士に弟子入りしたことで、連絡がつかなくなっていたのだ。アメルダムに戻るときは必ず知らせると言う約束はしていた。

「ほう。マウリッツの奴・・・やっと戻ってくるのか・・・ふむ・・・
・公国医学院で特別講演をするから来いと。流石に忙しそうだな・・・
・あ、そうだ・・・」

ウイレムはあることを思いついた。

「ヤンも医者を目指すのならマウリッツの講演ぐらい聞きに行くのもいいだろうな・・・あ、招待状は一枚だけか・・・」

マウリッツが別に対して医術に興味のないウィレムを講演会に招いたのは、それぐらいしか会える時間を作ることができないからだろう。招待状は一枚だけなので、ウィレムが行くのを辞めない限りはヤンは行けない。

「っ・・・どつかでもう一枚ぐらい確保できないだろうか・・・」

ぶつぶつと独り言をしゃべっているが、執事はこうした主に慣れていた。思考の邪魔にならぬよう、音を立てずに部屋を出て、食事の準備をメイドたちに支持するためにキッチンに向かった。

食欲はあまりないが、ヤンの同席する昼食で二日酔いだと知られると、まだ十代半ばの弟から小言を言われる事になる。ウィレムはできるだけ、平常の振りをして、オートミール、サラダなどを動きの鈍い胃袋に放り込む。

「兄上・・・無理をなさらなくても・・・二日酔いなのはバレバレですよ。顔色が良くないですし・・・お帰りになったのはもう朝方でしたしね」

マセた口調で皮肉とも説教とも付かないことを言うヤンは、軽い溜息をついた。生意気な口調で大人びたことを言いたい年頃である。

「・・・ぐ・・・ああ、俺の酒癖の話はとりあえず置いておいて、今度な、公国医学院に講演を聞きに行かんか？」

「医術の勉強はしたいと思いますが、公国医学院には興味はありません」

冷めた口調でこう返されることはウィレムには予想ができていた。

「ああ、別に医学院を見に行こうって話じゃない。講演するのは俺の友人の医者でな」

「医者に友達なんていらっしやったのですか……」

「ああ、マウリッツ・スタンジエという男だ。学塾の同級生でな」

「ま、マウリッツ・スタンジエ先生っ？！あの、スペルファ熱の治療法を確立したっ？！」

ヤンの興奮度合いにウィレムは驚いた。

「知っているのか？」

「そりゃ有名な方ですから。ヨアヒム・カイパー博士の唯一のお弟子さんで、豊富な臨床経験と綿密な実験で数々の研究実績を残しておられる……兄上がお知り合いだなんて……」

ふむ……とウィレムは声を立てずにわらった。普段のヤンなら兄のそつした様子に気づくのだが、今は興奮しすぎてまったく見えない。

「まあ、講演に行けば少しぐらい話ができるだろう。時間をとってもらえば食事にぐらいいけるかもな。なにせ俺の親友だ。どうだ？」

「え……あ……」

実はヤンは兄の世話になるということに抵抗感を持っていた。腹違いの弟である自分の為に、兄はずいぶんと手を焼いてくれていることに気づいている。子供ゆえの考え方だが、だからこそ、公国医学

院への進学も断ってきたのだ。別に医術を学ぶのに学校に行かなくとも、優れた臨床医の医生になればそれで十分とも考えてはいるが、学費や推薦のための手引きで迷惑は掛けたくないと思っているのも確かであった。

「で、どうだ？」

「・・・」

ヤンは悩んだが、単に旧友であるというだけの話だし、進学や医生の話は出てきていない。結局、好奇心が疑念やプライドを上回った。

「い、行きたいです」

ヤンにその気を起こさせたのはいいが、招待状は自分宛の一通しかない。マウリッツは講演の直前にアメルダム入りをする予定である。本人に頼むことは難しい状況だった。

「そうか・・・たしか、あの時シルヴィア殿と一緒にいた、カリスと言う娘さんは公国医学院の学生だったな・・・連絡先がわかれば頼みに行きたいところだが・・・」

食後、庭で軽い運動をしながら考え事をしていた。二日酔いの時は軽い運動でもして、汗を流してしまうのが良いとこの男は考えている。ヤンはやはり書斎に籠って勉強をしていた。

「旦那様っ！シルヴィア様とおっしゃるご婦人の使者の方からお手紙が・・・」

幾分、興奮した表情で執事が掛け寄ってきた。使者は家名を告げずに、シルヴィアの名だけを言ってお手紙を渡したのだが、封に使われている紋章を執事は知っていたのである。公国有数の伯爵家の一つ、ファン・フェールメル家の女性当主が自分の無骨な主に手紙を送ってくるとは……。

「ほう……食事の誘いか……昨日の今日で……」

「あの……失礼ですが、どういったお知り合いなのですか？」

「ん？ああ、昨日警備で行っていたパーティでな。警備しながらだが少し言葉を交わして、軽く意気投合したと言う感じだ」

「し、シルヴィア・ファン・フェルメル様と……」

「ああ、あんまり家柄とかも気にしない、気品はあるが気さくな感じのご婦人だったな」

「つい……ウイレム様……ご、ご健闘をお祈りしております！」

「は？」

執事が意気込むのも無理はない。女性から男性を食事に誘うなどと言うのは、女性の権利が強いルワーズ公国でもそうそうあることではないからだ。家名を言わずに使者が手紙を持ってきたのも、これは私的な誘いであるからである。女遊びをすと言う程でもないが、ウイレムは女性には慣れていた。だが、結婚につながるような真剣な付き合いというのはあまりなく、相手の女性も火遊びでしかないような感じであった。だが、ファン・フェルメル家の女性当主ともなれば、遊びでは済まされない。

実際には、簡単に結婚など出来る相手でもないのだが、多少なりとも真剣な付き合いが出来そうな相手であれば、執事としてはウイレムが変わるきっかけになるかもしれないと期待できるのであった。まして、公国有数の大貴族ともなれば。

「ま、日時は今夜でもよさそうだな・・・返事は？」

「は、使者の方は門前でお待ちですので」

「ふむ・・・場所はこちらで決めて欲しいみたいだな。まあ、お屋敷でという分けにもいかんのだろうし、高級店も目につくか・・・使者に牡鹿亭の場所を伝えてくれ。そこでお待ちすることにする」

「牡鹿亭でございますか・・・それはあんまりに・・・」

牡鹿亭はウィレムお気に入りの料理屋で、ウィレムと一緒に行動することを好まないヤンも、ここに外食するときだけは文句を言わずに付き合う。執事が贅意を示さないのは、大貴族が行くにしては庶民的に過ぎるからだ。一般的な家庭であっても、月に一度の贅沢ぐらいには利用できるという程度の店である。

「ふん。格好つけたところで、高級店のかしこまった料理などシルヴィア殿は食べ飽きていることだろうさ。相手が誰であろうと俺は俺流だ」

「さ、さようでございますか・・・」

執事は返事を伝えるために門に向かった。

「いきなりお願いごとをするのもなんだが・・・招待状の目処が立ちそうだな」

公国の至宝、ウィレムとシルヴィアその3

「昨日の今日でお会いしてこうして、こうしてお誘いするのもどうかと思ったのですけれど、護国騎士団では夜間警備のあとはお休みと伺いましたので・・・それに、あまりこうしてゆっくりできるお店も存じてないものですから・・・」

「いえいえ。お声をかけていただけてとても光栄です」

牡鹿亭の中でも特に奥にある個室での会話である。ファン・フェルメール家の女当主ともなれば、男女関係の噂は社交界で瞬く間に広がってしまう。馬鹿らしいことであるが、人目を忍ぶ必要があるということも、ウィレムがこの店を選んだ理由であった。

「実はこの前のお話の続きがしなかったのです」

「この前の話といえますと？」

「この時期にああしたパーティを開くようなこの国の風潮についてです」

二人の前にはたくさんの料理がおかれている。先日のパーティのほど洗練されてはいないが、フリップ風、ラウラ風、スペルファ風などの料理を形式にとらわれず、いいとこどりしたコース料理がこの店の特徴である。また、お高く留まった形式にうるさい店でもないで、ウィレムの口利きにより、全ての料理がまとめて運び込まれた。一皿食べるごとに皿を換えに店員が出入するようではゆっくりと話しをするのにも向かない。

シルヴィアの、男女の食事の場では少々不似合いな話題の振りに、ウィレムは答えた。

「ふむ。危機感が足りないと言うよりは、やはり、一種の現実逃避でしょうかね。どうしていいかわからないので、考えるのをやめていると言う感じがします。特に・・・」

ここでウイレムは声を低めた。別に誰が聞いているはずもないのだが、そうすることで、返ってこつした会話に臨場感が出る。あまり人に聞かれたくない話と言うのを、男女間ですと言うのはそれ自体が娯楽であるとウイレムは考えていた。

「ファン・ダルファー侯にはそういう心の動きが感じられますな・・・」

「おっしゃるとおりです。私は女ですので、直接政治に関わることは難しいですが、そうは言っても、ファン・フェルメル家の当主と言う不相应な身分にありますので、何かこの国のためにできないかと思っていたのですが・・・」

「なるほど・・・私がシルヴィア殿について存じておりますのは、その美貌や家柄よりも、政治や経済に関する見識の高さです。あなたのような方が女性であると言う理由だけでその力を発揮できないと言うのは、勿体無いですよ」

齒の浮くような言葉を、真面目な話にさり気なく混ぜるのもウイレムはうまかった。気づかない程度のお世辞と言うのは、聞いている側が気づかないうちに、深層心理に刻み込まれるらしい。

「ところが・・・そうした機会をいただけそうな話があります・・・できれば、ファン・バステン卿のご意見を伺いたいです」

「私などで宜しければ相談に乗りますが、どういうことでしょうか？」

「実は、ファン・レオニー伯から秘書官として私を迎えたいとの要望がございまして」

「ほう、それは・・・」

国務府首席参事官ベルト・ファン・レオニーは公国政府内における非主流派である。家柄としては申し分ないのだが、元々政治の中枢には縁の薄い家系であった。ベルトの才覚一つで国務卿とは不和であるにも関わらず、ここまでの出世を果たした男である。しかし、それは自分にとっての味方少ないと言う状況を作り出してしまった。結果として、信頼できる腹心を持ち得ていない。

「なるほど。ファン・レオニー伯はあなたの政治に関する識見を買っておられるのでしょうか。伯にとっては、どの派閥にも属していない、家柄も良く能力もある人物を味方にほしいのでしょうか」

「ええ。ファン・レオニー伯は真剣に国家の行く末を考えておられる方です。しかし・・・」

「何か御不安な点でも？」

「ファン・フェルメールの家名と私が女性であると言うことを利用しようと言う意図も見え隠れしております」

「ふむ。なにせああして苦労してのし上がって来た方ですからな。そついた思考法になることもあるでしょう。しかし、それは彼の中での問題であつて、シルヴィア殿にとってはそれほど関係ないのでありませんか？」

「関係ない？」

ウィレムの言葉にシルヴィアは初めて意外そうな顔をした。これだけ賢しげな女性にそうした表情をさせることには微量の快感らしきものを覚える。

「ファン・レオニー伯の意図などは直接はあなたに関わりのないこと。あなた自身はご自分のなさりたいことをすればいい。忠誠を誓う必要などありません。伯に与えられた地位と権限を利用して、国

家と国民のために働くことができればそれでいいのではありませんか？」

じつと、シルヴィアの目を見ながら瞬きもせずと言ってみせた。

「・・・そのような考え方もあるのですね・・・。とても感銘を受けました・・・私、やってみることにいたします」

「あなたのような方が力を発揮すれば、国家の危機も乗り越えることができるかもしれない。実に素晴らしいことではありませんか」

「私は政治はともかく軍事には明るくありません。今後何かとご相談することもあるかもしれませんが、よろしく願います」

「たいしたことはできないかもしれませんが、できることは何でもさせていただきますよ」

「ええ。期待させていただきますわ」

ここでウィレムは話題を変えることにした。あまりにも話しに色気がなさすぎる。別に口説き落とそうとしているわけでもないが、政治の話をするのはまるで仕事でもしているかのような気分であった。

「ところで、どうして私などにそのような大事なご相談を？」

「ファン・バステン卿には家柄などにはこだわらず、客観的なご意見をいただけたらと思います。ほとんどの貴族の男性は、ファン・フェルメル家の家名に遠慮したり、露骨なお世辞を口にしますが、ファン・バステン卿はさりげない程度にしかそうしたことは口になさらないようですから」

『さりげない』の箇所でシルヴィアは人の悪い笑みを浮かべ、ウィレムは苦笑いをした。気づかない程度に散りばめていた世辞に気づかれていたようである。

「これは一本とられました・・・」
「まあ、ウィレム卿に言われるのであれば、お世辞も悪い気はしません」

シルヴィアはウィレムの顔をじつと見ている。媚びるわけでもなく、ただただ、ウィレムの瞳をのぞき込んでいた。自分と同質の感情がウィレムの中にもあるのかを確かめるために。

だが、ウィレムとしては先に大事な頼みごとをしなければならなかった。

「シルヴィア殿。実は一つお願いがございます」

「え・・・あ、はい。ご相談に乗っていただきましたし、できるところであれば」

「マウリッツ・スタンジエと言う男はご存じですか？」

シルヴィアはまた幾分驚いた。

「え・・・ええ。スペルファ熱の治療法を確立された名医の先生ですわ。実は、師にあたるヨアヒム・カイパー博士とは先代からお付き合いがございます。今度、スタンジエ先生が講演をなさるので、それにもご招待いただいていますわ」

「それはそれは。実はマウリッツ・スタンジエとは幼馴染でして。私も招待状をもらってはいるのですが、一枚のみで。せっかくの機会なので、弟も連れていきたいのですが・・・」

「なるほど。カイパー博士からは数枚の招待券をいただいております。おすそ分けいたしますわ。ウィレム殿もお越しになるのですか？」

「ええ。マウリッツと会うのも久しぶりですしね」

「弟さんとも一緒にさせていただきますよよろしいかしら？」

「もちろんです。人見知りをする奴ですし、実はマウリッツの事を知っていて、楽しみでたまらんようですから、そっちに夢中で邪魔にもならんでしょう」

「あら・・・」

ウィレムがさり気なく、シルヴィアと二人で時間を過ごしたい旨を口にしたので、シルヴィアは少し赤くなった。普段、堂々たる貴婦人として振舞っているが、こういう時だけはずいぶんと可愛らしい若い娘の顔になる。

「昨夜はあまり眠れなかったようだな」

「・・・」

黙ってしまったヤンを見てウィレムはほくそ笑んだ。マウリッツ・スタンジエに会えるというだけでずいぶんと興奮したようである。普段年齢に比してずいぶんと賢しげで冷静なヤンだけに、このような状態になることはめずらしい。

「ずいぶんと早めに出たように思われますがどうしてですか？兄上・・・」

ヤンは話題をそらすために、たいして興味もないのに聞いてみた。

「ん、ああ、ちょっとよるところがあつてな」

馬車がたどり着いたのは、ヤンの知らない大邸宅の裏口であった。そもそもヤンはほとんど外にでない上に、パーティなどにも出席し

ないので、貴族の屋敷や家紋などにはまったく知識がない。

「お迎えに来ていただきありがとうございます」

「シルヴィア殿。こちらが弟のヤンになります」

ヤンは驚いた。元々多少は女性関係の派手なウィレムだが、これほど美しく、気品のある女性と親交があるとは思っていなかったのである。

「ヤン・エツシャーです」

「あら？」

「ああ、ヤンはどうも貴族の称号が嫌いみたいでしてね。何より亡くなった母親の姓を大切にしたいとのことで、母親の姓を名乗っているのですよ」

「そうですね。シルヴィア・ファン・フェルメールです。お兄様には何かとご相談に乗っていただいています」

相談に乗ってもらったと言っても、一度だけなのだが、そうとしか自己紹介のしようがなかった。

「ヤン。お前の分の招待券を都合くださったのはこちらのシルヴィア殿だ」

「あ、ありがとうございます！」

「そんなに喜んでいただけで嬉しいわ」

その後は、ヤンはあまりしゃべらなかった。頭の中は講演のことでいっぱいなのである。ウィレムとシルヴィアは公国医学院の創立時のカイパー博士の功績について話して馬車の中での時間を潰していた。

ガタガタと言う音共に突然馬車が止まる。御者を務めている初老の執事が張りのある声でさげんだ。

「狼藉者よっ！この馬車は武門の誉あるファン・バステン男爵家のものであるっ！正当な理由なくして通行を妨害したとなれば、命のやり取りになると心得よっ！」

ファン・バステン家は家格こそ男爵家であるが、武門の家柄としては有名で、本来伯爵位以上の貴族しか就任したことのない保安兵団長を勤めたこともある。執事は元々先代であるウィレムとヤンの父が保安兵団長を勤めていた際に捕縛した群盗の長であった。その人柄を気に入った父が、特赦を申請し、執事として自分に仕えさせたのである。老いたりと言えど、眼光鋭く、その叱咤は腹にずしりと響く。

ウィレムが馬車についた前方の小窓を除くと、十数名程度の男たちが剣を抜いて立ちはだかっていた。全員、顔は布を巻いて隠している。

「ふむ。時間にはそれほど余裕はないが・・・」

「何者でしょうか・・・」

「シルヴィア殿がこの馬車に乗ることはわかるはずがありません。裏口につけてお乗りになるときは誰もいませんでした。ポールはそのようなヘマをやる男ではありません」

ポールとはファン・バステン家の執事の名である。

「つまり、私かヤンを狙ったことでしょうか、まあ、ヤンを狙う理由なんてありませんな。敵を作っているという意味では私が狙いでしょう」

「ずいぶんと自信過剰な奴らですね。兄上。それともモノを知らないのでしょうか？」

「まったくだ。が、さて、あんまり時間を取られたくないのはお前も同じだろう？」

シルヴィアには兄弟の会話の意味がよくわか「な藍。『時間がない』とはどういう意味か。

「兄上はご婦人をお守りすることの方を優先されるでしょうか？道端の掃除は私が入ります。ポール！前方が空いたらすぐに走ってください！」

「は。ヤン様。こちらをお使いください」

ポールが渡したのは、一メートル程度の木の棒である。馬に言う事を聞かせたりするためのものだ。

「馬車が奴らを突破したら、私は走って追いつきます。おってくる奴がいたら、兄上、お願いしますね」

「ああ、いいだろう。あんなヤツら相手では戦術を駆使するなんてものにはならんがな」

「あ、あの・・・いつたい・・・」

珍しくシルヴィアは困惑している。実際、シルヴィア自身も多少は危険な目にあつたことはあるし、ウィレムの手並みは先日マルコの件で承知しているから、この場を切り抜けることぐらいはどうかなるだろうとは思っている。だが、ヤンがやる気満々なのはこういうことか？賢そうでも腕っ節は特別強そうには見えない、十代半ばの子供なのである。

「ま、講演前の余興と思って御覧下さい。ヤン、やりすぎんなよっ
「！」

「講演に遅刻しないようにはしたいですね」

そんな話をしているあいだは、ポールがまったくスキを見せずに男たちを睨みつけ、牽制していた。困んでいるはずの男たちの方に動揺が走る。距離を詰めることすらできてない。

馬車には天窓がついていた。ヤンはそこから、屋根の上に登る。体が外に出た瞬間、弾けるように前方へ飛び出し、男たちに向かって駆け出した。

剣を持った男たちは全く反応出来ていない。正面にいた男が眼前に迫ってようやく動き出し、剣を振り下ろそうとした。だが、その前に男は右足のスネに激痛を感じ、前のめりに倒れる。ヤンの姿は眼前にはすでにない。男の前で地をはうような低い姿勢になり、横を駆け抜けるついでに、右足にしたたかな一撃を叩きつけていたのだ。ヤンの動きは止まらない。右足をやられた男のすぐ横にいた小柄な男は、すばしっこいヤンを捕まえるためにヤンに組み付こうとした。彼らにはまだヤンが十五歳の子供だとはわかっていない。小柄な大人の使用人かなにかだろうと考えていた。剣を捨てて組み付こうとした男もそれをはたせずに、昏倒する。

後ろから、組み付かれたかに見えた瞬間、他の者からはヤンの体が、男の両腕の中で『ビクッ』と身を震わせたかのように見えた。実際には男がヤンの衣服に触れる寸前で、ヤンの持つ棒が正確に男の顎の先端を突き上げていたのだ。

さらに、首領格と思し男にヤンは接近した。この間、一瞬足りとも動きを止めたりはしない。ほとんどのモノは何が起こっているかも認識していなかった。首領格の男はおろかにも、ヤンに向かって大

股で駆け寄ろうとしていた。が、間抜けなことに小石につまづいて転びそうになる。その瞬間にはヤンはやはり低い姿勢でその足元にいた。後ろの足に棒を引つ掛け、跳ね上げる。男はまるで風車のように空中で大きく回転し、数メートル離れたところに背中から落ちた。

その瞬間、急に馬車が動き出す。通り道にいたヤンはひらりと舞い上がり、飛んで道の脇へとよけた。その時、寝たままの首領格の男の腕の上に落ちて、思い切り踏みぬいている。体重の軽いとは言え、飛んでいるので勢いはある。男の腕の骨にはこれでヒビがはいった。

「いつ、痛えっ！！！」

「情けない声を出すもんじゃありませんよ。多勢に無勢で襲いかかっ
つておいて……」

ヤンはその男の事など全く気に留めていなかったが、ウィレムとシルヴィアにはその男の声に聞き覚えがあった。

「今の声……マルコ卿では……」

「ふむ。聞き覚えのある声ですが……まあ、あとの処理はどうに
でもなるでしょう。十五歳の子供にしてやられたとなれば、ファン・
ピケ家にとっては武道不覚悟もいいところです」

澄ました顔でいいながら、ウィレムは外に出る。馬車は男たちの板
場所から数十メートル離れたところで停止していた。

「ヤンっ！もういいぞっ！」

まるで飼い主に呼ばれた忠犬のように、呼ばれたヤンはこちらに駆け寄ってくる。何名かの男たちが追いつてきたが、ヤンとの距離は縮まらない。さらに、そこでウィレムは道端の小石を広げて恐

ろしい速度と正確さでそれを投げた。追いつがってきた四名のうち、二人はちょうど眉間のうちに石を受けて昏倒、一人は右足の向こう脛にあたり、激痛に立っていることすらできなくなり倒れこむ。最後の一人は狙ってか偶然か股間に命中し、悶絶している。

ヤンが馬車に駆け込むのを待つて、ウィレムも乗り込み、医学院に向けて走り去っていくのを男たちは見送るだけであった。

公国の至宝、ウィレムとシルヴィアその4

ウィレム、シルヴィアとヤンの三人は公国医学院の裏口に回った。表門から入るのは目立ちすぎる。シルヴィアのような名門貴族であれば身の安全が保証されない人ごみの中に入るのは問題があった。事前に連絡してあるので、招待状を見せるとすぐにそのままマウリツ・スタンジエの控え室に通される。警備の者は本人から言い含められていたらしい。

「大活躍だな。マウリツ。長きにわたる海外旅行は楽しめたか？」
「これはこれは、公国史上最年少の護国騎士団副隊長殿。あいにく観光ではなくてね。楽しむ余地などさっぱりなかったさ」

マウリツ・スタンジエとウィレムは方肩を叩きあつて再会を祝した。

「こつちは、ああ、話したことはあつたか。俺の弟のヤンだ。お前に会えることを楽しみにしていたらしい。医術の学びたいらしくてね」

「は、はじめまして。ヤンです」

「こちらこそはじめまして。マウリツ・スタンジエです。ウィレムの弟というからイカツイ奴を想像していたんだが、なかなか美男子じゃないか」

「ふんつ。整った顔立ちがいいとはかぎらないんだよ」

三人の会話をよそに、シルヴィアはマウリツとともに控え室にいた老人に挨拶をする。

「お久しぶりでございます。カイパー博士」

「ほほう・・・すっかり大人の女になりましたな。シルヴィア殿。最後に会ったときはまだまだ幼い女の子だったのに」

「もう、二十を超えましたので。博士はお代わりありませんね」

ヨアヒム・カイパー博士。ルワーズ公国医学会における重鎮である。公国医学院の立ち上げなどルワーズ公国の医療政策の充実について、大きな役割を果たしたと言われる人物であるが、公職についたことは殆どない。医療政策の充実は歴代の国公に対して、彼が陰ながら働きかけたために実現されたと言われてはいるが、実際のところ、どのような形で彼の考えが政策に影響したのか、どのようにして君主たる国公の耳にそれが届いたのかはわからない。

ただ、公国医学院が設立される以前の医学会で『博士』の称号を得るためには、複数のやはり博士号を持つ医師の推薦が必要な上、伯爵以上の爵位を持つ貴族がそのお墨付きを与える必要があった。これは、広い意味でのフリップ王国文化圏、つまり、フリップ、ルワーズ、インテグラの三カ国に共通するもので、その証明書なく『博士』を名乗ることは、医師免許の剥奪につながる重罪であった。

カイパー博士の推薦人はすでに亡くなっているが、由緒正しい医家の当主ばかりであり、お墨付きを与えた人物には当時の国公の名が入っている。出所不明の謎の人物で、しかも、公私共に認める変人であり、見た目には浮浪者と見まごうほど見窄らしい汚いじいさんではない。それでも、どこにいたとしても、不思議と違和感を感じない人物であった。

シルヴィアの父はカイパー博士とは友人関係であったと言う。シルヴィア自身もそのつながりはよくは知らないが、流浪の医師として、周辺諸国を旅する彼にファン・フェルメール家は資金提供をしている。

カイパー博士と共に、シルヴィアとヤンは講演会の会場に先に向かった。ウイレムだけはマウリッツと相談があると言って残った。

「マウリッツ、ヤンを見てどう思う？」

「うむ。なかなか賢そうじゃないか。ちよつと変わっているが真面目そうだし、公国医学院にでも入れれば良い医者になるんじゃないか？」

「ところが、本人は医学院には行かないというんだ。何こだわりがあるのかはわからんが・・・」

「なるほど・・・医術以外に興味のあることは？」

「好きでやっているわけではないと本人は言うんだが、武術の稽古は欠かしたことがない。実際腕前は・・・俺が本気でやっても三本に一本は取られる」

「それほどか。なるほど・・・それなら、カイパー博士に話してみるか・・・」

「うむ。そうしてくれるとありがたい。ただし、俺の頼みだとは本入バれないようにしてほしい」

「そうだな。よほどの意地っ張りのようだからな。お前に手間をかけさせたくないんだろうよ」

こうして、ウイレムとマウリッツの間では、ヤンのカイパー博士への弟子入りが決まったが、本人は知らない。ヤン自身の考えはウイレムにはわかりかねる部分もあるが、一方で、マウリッツと会えることがわかった時の興奮した様子から、脈はあるだろうと見てはいるのだった。

講演会場は大入りだった。医学院でも最も大きな講義室に立ち見ま

で出ている。

『スペルファ熱治療法の確立至るまでの経緯』

と題された講演は熱の入ったものとなった。マウリッツはそれほど話のうまい男ではないが、十年近くにわたり猛威を振るった伝染病の治療法確立の経緯は、会場内の多くの医師や医師の卵達に感銘を与えていた。

その中には、当日の会場の準備を手伝うためにシルヴィアに同行できなかつたカリス・クリステルもいる。カリスにとってみれば、年の近い医師では始めて尊敬に値する人物を見つけた思いであった。一方で、医学院を出ておらず、博士号も得ていないマウリッツが高評価を得ることに反発を覚えている者もいた。医学院を卒業後、助手として籍を置いているフィンセント・ファン・クラツペなどがその代表格であった。同年代でエリート医師である彼にしてみれば、スペルファ熱の治療法確立したという名誉を、名もなき医者に横取りされたようにすら思えたのだった。

三日後、突然、ヤンはファン・バステン家の屋敷から姿を消した。置き手紙には、ヨアヒム・カイパー博士に師事したい事、弟子入りが許されなくとも、博士に同行して旅をするつもりである旨が書かれていた。

同時にウィレムにはマウリッツからの手紙が届いている。カイパー博士もヤンを気に入ったこと。当面はマウリッツも一緒にルワーズ国内を回ることが書かれており、ヤンについては心配する必要はないようだった。

兄弟二人と使用人だけの生活から、重要なピースが一つかけてしまったわけだが、それほど寂しい思いはしていない。三日と開けずにファン・バステン家にはシルヴィアが訪ねてくるようになった。そのうち、社交界でも噂は広まってしまっただろうが、さほど気にするつもりもなかった。

アメルダムの花〜カリスとサスキアその1〜（前書き）

アメルダムの花〜カリスとサスキアその1〜

季節は春。『花の都アメルダム』はその通り名が示す通り、色とりどりの花々に彩られていた。花はルワーズ公国にとつて一つの産業として成立している。品種改良の技術も発達し、毎年新しい種類が開発され、種子や球根が国際取引される。アメルダム市民にとって花は街角や家々を飾るだけでなく、生活の糧であり、特殊な歴史性を持つ公国の一つのアイデンティティを示すものですらある。

しかし、『アメルダムの花』とは、そうした街角を飾る花々を常に指しているわけではない。開明派の優勢なルワーズ公国ならではの才色兼備の女性達を指す言葉としても定着していた。その代表格といえば、シルヴィア・ファン・ファン・フェルメール、後の護国騎士団長婦人シルヴィア・ファン・バステンであるが、今一人、女医カリス・クリステルも『アメルダムの花』を代表する女性であろう。

カリスには血の繋がらない義理の妹がいる。サスキア・ウテワールは後に公国の英雄となるヤン・エッシャーの幼馴染であるが、ルワーズ公位継承線から十三年経つまで頑なに本人に会おうとはしなかった。姉同様、女性ながら医師を目指すのに十分な知性を持ちながら、あえて看護婦への道を選んだ彼女だが、やはり、『アメルダムの花』の一人であろう。

これは、カリスとサスキアの二人の姉妹の物語である。

「カリス、こちらが昨日話した君の妹だ。さ、挨拶しよう」
「は、はじめまして。さ、サスキア・ウテワールです」

父親が連れてきたのはまだ十一歳の少女であった。公国医学院の受験と合格後は医師を目指しての勉強のために、親子の会話も減ってきたことに父が寂しがつていることに気づいたカリスは、古い知人の娘であると言う少女を、クリステル家で受け入れることに反対しなかった。一人っ子の自分にとつても楽しみであった。

「はじめまして。サスキアっていい名前ね。これから私たちは姉妹よ。よろしくね」

「は、はいっ！よろしくお願いします」

八歳違いの血の繋がらない二人は、最初はぎこちないながらも仲の良い姉妹として近所に知られるようになった。公国医学院に通いだしたカリスは忙しかったが、時間があれば、妹に付き合つてやった。

と言つても十一歳にしてはサスキアは全く手の掛からない娘であった。一人でいる時は、多くの時間を読書に費やしていた。主に医療技術に関する書籍を読みあさるその様は医者卵として日々猛勉強を必要とするカリスに引けを取らないものであった。自分の身の回りのことは全て自分で片付けてしまう。カリスがサスキアにしてやれることは、一緒になって本を読み、時に解説してあげることくらいで、それは、カリス自身にとつても勉強になることであつた。

クリステル家では、父親の方針で週末は使用人たちを帰してしまい、娘たちが食事の準備などの家事を担当した。クリステル家は商家ではあるが、資産は大貴族にも匹敵する。平民としては名家と言つていい格式があるのだが、父親は家柄などには興味がなかった。娘たちが男ばりに働け、かつ、自立して生きて行けることができるようにと言つのが教育の方針であつた。

この家事については、十年以上その習慣にしたがつて来た十九歳の

カリスもサスキアのマメさには舌を巻いた。たんに、家事が器用であるとかテキパキとしていると言う程度ではなく、料理を作らせれば料理屋のコックが務まるのではないかと思えるほど絶品だし、掃除をしても平日のメイドたちよりもさらにきめ細かに目が行き届いていた。孤児院にいる間も様々な家事の手伝いをしていたし、そもそもがそうした生活能力が高いようであった。

「本当にサスキアは何でもできるのね」

「お、お姉さま、そんなことはないです。もっともっと勉強して、ちゃんと役に立てるようになりたい・・・」

「ん？役に立ちたいって誰の？」

サスキアは急に赤面した。サスキアは屋敷に来て数日たったところから、カリスの事を『お姉さま』と呼ぶようになった。親身になってくれるカリスを本当に姉のように思えてきたのだろう。

「で・・・あの・・・」

「ほほう・・・男の子？」

「そ、それは・・・」

少しだけ意地悪な顔になったカリスだが、それ以上は問い詰めなかった。

カリスはあまり屋敷から出ようとしないサスキアに、できるだけいろいろなことを話した。平民とは言え公国有数の財産家であるから、社交界にあつても決して無名ではない。舞踏会やパーティにも出席するようになったカリスは、外で経験した様々なことをサスキアに話していた。

その中には、シルヴィアと共に出席したパーティーであった、快男児
ウイレム・ファン・バステンの話も含まれていた。サスキアはヤン
が引き取られていったのが、ファン・バステン家であることを知っ
ている。だが、サスキアはヤンに会おうとはしなかったし、しばら
くの間はヤンのことをカリスに話もしなかった。

初めてヤンと自分の関係を話したのは、十三才になったある日のこ
とであった。

「サスキア、今度一緒にシルヴィア様が主催されるパーティーに出て
みない？パーティーって言っても、気心の知れた人たちだけが集まる
小さなものよ。ファン・フェルメル家としてではなく、シルヴィ
ア様個人がお友達を招いて、お庭の花の鑑賞会をされるのよ」

「お姉さま、どんな方々がお越しになるの？」

「ん・・・ほら、シルヴィア様が・・・まあ、大きな声では言えな
いけれどご執心のウイレム・ファン・バステン卿とか・・・ああ、
旅に出ていた弟さんも誘うと仰ってたわね」

急に、サスキアがびっくりしたような表情になった。

「ん？」

「あ、あの・・・お姉さま・・・私・・・い、いけませんっ！」

ただならぬ妹の様子にカリスは驚いた。滅多なことでは取り乱した
りするような娘ではないのだ。十三才とは言え、年齢以上に大人び
た妹が、赤面をしながら強情に行きたくないと言い張る。そもそも、
そんな頑なに拒否しなくても、気乗りしないとさえ言えばカリスは無理
に誘ったりはしないのだ。

「ああ・・・気乗りしないなら別に無理に誘わないわよ。ただ、ええと・・・確かヤン君っていつけ、ファン・バステン卿の弟さんはあなたと比較的年も近いから、どうかと思って・・・」

それがダメ押しになった。が、カリスは何となく、女の勘としか言えないが、サスキアの取り乱した理由はウィレムの弟にありそうだということは予想していたのだ。

赤面して、若干震えだすサスキアを見て、カリスは優しく頭を撫でてやった。

「ファン・バステン卿の弟さんを知っているのね？ひょっとして、あなたが役に立ちたい人って・・・」

サスキアは何も言わずにコクリと頷いた。

「そういえば、弟さんも孤児院にいた事があるって言ってたわね・・・でも・・・どうして会えないの？好きなんでしょ？」

サスキアはさらに顔を真赤にしたが、どうにか落ち着いて話を始めた。

「お姉さま・・・私、ヤンにはまだ会えません。まだ・・・なんにもできない子供だから・・・」

「子供だからって・・・その、ヤン君だってまだ子供じゃない。今年で、たしか十七だったかしら」

「ヤンは頭もいいし、何でもできて・・・医者になる修行をしているなら、もうきつと一人前・・・私はまだ何もできないから・・・」

うーん・・・とうめきながらカリスは声の調子を変えた。

「あなたが何もできないなんてことはないわよ。自分のことはちゃんと自分でできるし、頭がいいって言うなら、あなただって相当なものよ?」

「でも、私はまだ勉強しているだけで、患者さんの役に立つことなんてできません」

カリスは小さなため息をついた。

「患者さんの役に立つなんて話をしたら、私だってまだ学生でなんにもできないわ。ヤン君はカイパー博士と旅をしているなら、その手伝いはしているかもしれないけど、そんなこと言っていたらいつまでも会えないわよ」

「・・・私・・・ちゃんと大人になってから、お互い一人前になってから会いたい・・・」

ふと、カリスは二人の年齢のことを思った。ヤンは確か今年で十七、サスキアは十三歳で、大人びていると言っても、この年頃の四歳差はずいぶんと違う。もう五年もすれば大した問題にはならないが、十代の二人には大きな問題だろう。そもそも、十三歳のサスキアでは恋愛沙汰と呼ぶのも少々無理があるぐらいだ。

「わかったわ。無理に合わせようとも思わないし、ヤン君にあなたのことを話したりもしない。でも、会いたくなったらいつでも素直に言うのよ」

「お姉さま・・・」

こうして、サスキアは引き続き、いつかヤンと共に患者の役に立てることを夢見て日々勉強に勤しむのであった。

医者となるのに十分な知性を持ちながら、看護婦となることを希望するサスキアが、それを叶えるのに至ったのは、それから三年後の十六歳の時である。その間、ルワーズ公国ではフリップ・インテグラ両王国が対峙した公爵位継承戦争、続いてそれを発端とした吸血鬼掃討戦があり、ヤン・エツシャーは陰ながらルワーズ公国の歴史に大きく関わる働きをした。また、シルヴィア・ファン・フェルメルはヤンの才覚を生かすために宮廷内で奔走し、ウイレム・ファン・バステンは命令書の偽装という強引な手段で吸血鬼掃討作戦を実施、その功績を持って將軍格たる護国騎士団長へと昇進を遂げ、二人は結婚する。しかし、これはまた別の話である。

カリスとサスキアの二人は、ルワーズの歴史を大きく左右した、二つの戦争にはほとんど関わっていない。シルヴィアの口からヤン・エツシャーとマウリッツ・スタンジエの活躍について耳にし、姉妹そろって歓喜した程度である。

血の繋がらない姉妹たる二輪のアメルダムの花が、多少なりとも名を知られることとなった事件は、ヤンがカイパー博士と共に再び旅だった後の話である。

アメルダムの花々カリスとサスキアその2々（前書き）

中途半端なところで止まっていて申し訳ありませんでした。こっちはそんなにハイペースにはならないですが、やめるつもりはありませんので。

本編、『不死騎』や新連載『ヴェスタラ戦記』もよろしくお願いします！

アメルダムの花々カリスとサスキアその2

「先生、カルテの整理は終わりました。今日はもう帰りませんか？」
妹が姉に向かつてのセリフである。生真面目な妹は職場においては姉の事を先生と呼ぶ。

姉妹と言っても、血のつながりはない。妹、サスキアは十八際。姉カリスは二十六歳。それぞれクリステル財団総合診療所の看護婦と医師となっていた。

カリスが公国医学院を卒業し医師資格を得た二年前、カリスの父は事故で亡くなった。商用での旅行中に馬車が暴走し、横転した際に打ちどころが悪くあっけなく亡くなってしまったのである。姉妹は互い以外に身内を失ってしまった。クリステル家はアメルダムでも最も有力な商家であり、資産は十二分にある。また、財団そのものの運営は、すでに元々父の部下であった理事たちに引き継がれており、問題はなかった。

姉妹は二人には大きすぎる屋敷を引き払い、街中の小さいが小奇麗な家に移り住んだ。そして、理事たちの勧めもあって、二人そろってクリステル財団総合診療所で働くこととなったのである。

女性の社会進出が著しいルワーズ公国にあっても、まだまだ女医と云うのは珍しい。女医と看護婦の美人姉妹が診てくれるとの噂はアメルダム中に広がり、当初、カリスの担当した内科の病棟は大忙しであった。しかし、質の良い患者ばかりが来るわけではない。ここ数日は不埒な目的で来院する男たちに二人共うんざりしていた。

例えばこの日の午後の診療である。

「はい。お大事にしてくださいね。次の方どうぞ」

胃痛が酷く、食欲がないという花屋の主人に薬を処方し終えたカリスが声を掛けた。診察室のカーテンの向こう側には次に診察する患者が待っている。サスキアが案内するはずなのだが、すぐに反応がなかった。

「何をしているんですかっ？」

突然、サスキアが大きな声をだす。あとから考えれば、悲鳴を発しないところはさすがであった。まだ十八歳の乙女なのである。

「いやはは、看護婦さん・・・俺はこの大事なところが痛くて痛くてたまらないんだ・・・ここが使い物にならないと困るだろ？」

男は多少酒が入っているようでもあった。いきなりズボンを脱いで下半身をさらけ出している。

「それが本当なら先生の前で見せてください！」

「いやあ、痛くてたまないんだよ。立ち上がることもできないから、看護婦さん、痛くないようにさすってくれんなあ」

ヨダレを垂らしながら下品なことを口走る。

シャツ、とカーテンが開け放たれた。カリスは手にメスを握っている。それには気づかず、男はさらに興奮した。十代の可愛らし看護婦に加えて、さっそうとした二十代の女医。露出狂の男はそれだけで絶頂に達する寸前であった。

「立ち上がることもできないほど痛いとなると一大事です。尿結石と言って体の中に石が出来ている可能性もあります。すぐさま手術が必要ですね。移動できないなら、麻酔もできませんが、そうも言っつてられませんので、すぐに切開しましょう。サスキアっ！ガーゼと消毒の準備をしてっ！」

「はい。先生」

サスキアも元気よく返事をした。とたんに男の顔が青ざめる。固く膨張していた局部も急激にしばみ始めた。カリスは手術用の手袋をはめ、真剣な顔つきのまま局部にメスを近づけた。

「あ、い、いや・・・先生・・・なんか・・・なんか、なんか平気みたいだっ！ほら、腫れも引いたみたいだし・・・きよ、今日はもう帰るよ・・・は、ははは・・・」

男はワタワタと股間をしまい、シャツがはみ出ままの格好で逃げるように診察室を飛び出していった。

そんなことがこのところ何度もある。二人共いい加減うんざりしていた。

「ねえ、サスキア・・・私たち、もうちょっと仕事のこと考えたほうがいいかも・・・」

「うーん・・・確かに、患者さんのことは助けてあげたいけど、あんな感じに人ばかりだと・・・」

サスキアの医療に対する情熱は姉以上であった。だが、それだけに馬鹿な男どもの下半身の熱病ばかり相手にしてはいられないのである。

「所長がね、産科の方に移らないかって言ってくださるのよ。一緒に移らない？」

「あら、とつてもいいお話じゃありませんか。私もああいう男の人達の相手をしているぐらいなら、赤ちゃんのお世話をしている方が、ずっと楽しいし」

「よし、そうしましょう。あんまりにも忙しすぎるし。今日ももう夜中だもんね」

翌週から二人は産科に移った。だが、今度は珍しい女医ととても気のきく看護婦が診てくれるとの事で、貴賤に関係なく様々な女性たちが二人の元を集まった。下品な男たちは来なくなったものの、忙しいことには全く変わらないのだった。

ある日の夕刻、驚いたことに最後の診療室に現れたのはシルヴィアであった。昨年にはウイレムと結婚して、すでにファン・バステン婦人となっている。健康そのものの貴婦人であり、何よりここは産科である。

「あら？ひよつとして・・・おめでたの可能性でも？」

カリスは素っ頓狂な声を出したが、逆にそれがシルヴィアをむっとさせた。

「カリス・・・患者に対してあんまり言いたい女ないわよ。逆のことで悩んでるんだから」

「ああ・・・なるほど・・・もう一年は立ちますものね・・・ちゃんと・・・夜はあるのよね？」

他の患者相手であれば特に気にしないことでも、身内となるとなんとなく聞きづらい。だがそれも言う方はもっとそうだろう。

「ウィレムも護国騎士団長になったばかりだから、そりゃ忙しいけど、だからってそれほどそれほど使われて返ってくるわけでもないわ。というか・・・」

さすがにシルヴィアは赤面しながら言った。

「ちょっと激しすぎるくらい・・・」

聞いている方も赤面してしまう。なにせ夫婦共知人であるから生々しい。特にサスキアは耳まで真っ赤にしまっている。

「え、ええと・・・実はあんまり回数が多すぎるのも良くないのよ？お互いの体の状態を考えて、体力のある時にするのが一番。あとは、排卵の周期もちゃんと意識していれば・・・まあ、それでも授かりものであることには変わらないんだけどね」

ずいぶんと恥ずかしい思いをしながらやってきた割に、特に納得のできるような答えを得られたわけではない。だが、とりあえず、悩みどころを親友に話せたのでシルヴィアの気持ちは少しだけ軽くなったようであった。

「はあ、ちょっと気をつけてみるわ。ウィレムに我慢させるのが大

変だけど・・・」

と言いながら再び赤面してしまう。照れ隠しか急に話題を転じた。

「そ、そうだ。待合室にはもう誰もいなかったから、診察はもう終わりでしょ？今日はウイレムも仕事で帰ってこないから、三人で食事にもいかない？久々に牡鹿亭にでもどう？女同士で」

「そうね。少し後片付けに時間がかかるけど・・・たまにはいいわね。サスキアもいいでしょ？」

カリスは確認したが断ることはないと思っていた。なにせ一緒に住んでいる。帰っても対してすることはないのだ。ちなみにこの日の食事の当番はカリスだったので、内心大喜びである。

「あ、はい。お邪魔じゃなければ」

「あら、変に遠慮するものじゃなくてよ？女同士、楽しく会話するのもたまにはいいものだわ」

「うちはいつも女同士ですけどね？」

「くすつ、医学院時代からお高くすました『鋼鉄の処女』で通つたものね。サスキアさんはどうなの？そろそろ・・・」

むっとするカリスだが、話がサスキアに向くとカリスは少し慌てた。

「ああ、奥様、じゃあすぐに準備するので待合室でお待ちいただけるかしら？」

「あ、ええ、女同士の楽しい話は食事をしながらにしましょうか」

そう言って、シルヴィアは診察室を出て行った。

牡鹿亭は決してお高く留まった高級店ではない。一般市民でもたまの贅沢に訪れることが出来る程度の店である。シルヴィアは元々公国有数の伯爵家、ファン・フェルメル家の女性当主であったし、カリスは平民とはいえ、アメルダム最大の商家クリステル家の令嬢である。しかし、サスキアを含め三人ともお高く止まった高級店よりもこの店のことが気に入っていた。シルヴィアとウィレムが始めて二人であった時もこの店を使ったという。

「でもねえ・・・十日間もぶつ通しで毎晩騎士たちを引き連れて呑み歩いていたのよ？あんまりにもハメを外しすぎるから、酒販店組合から苦情が届いたり・・・この前なんて、もういい加減まずいと思って、呑み屋で暴れていたのを首根っこひっ捕まえて、ここに連れてきて朝まで説教してやったんだから・・・」

独身の二人にしてみれば、正直、夫の愚痴をこぼす妻の話というのはそれほど面白いものではない。どうもこういいう話を出来る相手がないため、溜りに溜まったものを二人にぶちまけようとしていたのが、シルヴィアの今日の目的らしかった。多少、呆れながらもカリスとサスキアはシルヴィアの話聞いていた。

「ま、私の愚痴はこのへんにしておいて・・・で、二人共どうなの？」

「何がですか？」

全くわからないと言ったふうでサスキアは聞き返した。

「サスキアさんだってもう十八でしょ？好きな男の一人や二人ぐらい・・・それに、そろそろ結婚のことだって考えても早すぎたりはしないわ。カリスはぼうつとしてっていると、あっという間に・・・」

カリスの視線がきつくなつたのに気づいてシルヴィアが言葉を切つた。

「ああ・・・ええと・・・最近ね、ちよつと縁結びに凝っているものだから。パーティなんか顔を出すと、誰かいい人いないかつて、あつちこちらから声がかかるのよねえ。私は顔が広いからつて言うんだけど、まともにおすすめできる若い人なんてそんなにいないもの・・・」

扇子で口元を隠しながら、オホホと上品にし、しか何かをごまかすかのように笑つてみせた。

「カリスは・・・やっぱり・・・忘れ慣れない素敵なお方が相変わらず？」

「ん・・・んふんっ！え、えっへん！」

サスキアはカリスの妙な反応に驚いた。

「あら、サスキアさんはご存じないのね」

「ああ、お、奥様・・・そんな・・・」

「カリスはねある有名な先生にずっとゾツコンなのよ。自分も医者になつて立派になつたんだから、アタックをかければいいのに、意外とそういうことになると押しが弱いよねえ」

「え・・・全然知りませんでした。お姉さまも私に隠し事なんてしてんたんですね」

「さ、サスキアっ！」

「いえ、別にすねたりしてませんよ。で、どんな方なんですか？」

サスキアには珍しくずいぶん意地の悪い笑みを浮かべていた。

「医療を志すものならば誰もが知っている大先生よ」

「ひよつとして・・・ま・・・まさか・・・」

「医聖ヨアヒム・カイパー博士の一番弟子、スペルファ熱の治療法を確立し、伝染性吸血病の病理説明にも大きな貢献を成した公国中央医局長、マウリッツ・スタンジエ先生よ」

「お、お、奥様っ！」

声を荒らげたカリスだが、一瞬、ちよつとだけほつとした様子のサスキアに気づいた。

「あら？ひよつとして・・・『大先生』というキーワードで誰かを思い浮かべてドギマギしてなかった？」

今度はカリスが意地の悪い笑みを浮かべている。さっきの仕返しのももらしい。

「え、いえ、そんなことは・・・」

「あら？サスキアさんにも誰かそういう・・・憧れの人がいるのね？どれ、誰が言ってみなさい。この社交界の縁結び女王と呼ばれるシルヴィア様が姉妹纏めて面倒を・・・」

「ああ・・・とりあえず、まだ余計なことはしなくていいですわ。

奥様」

「あら、ずいぶん言うわね・・・カリス・・・で、サスキアさんはどなたが？」

「・・・」

サスキアは真っ赤である。うつむいて何も言えなくなってしまった。シルヴィアはこの賢い娘がこのような態度を取るのとは始めて見たのである。

「ひょっとして・・・私も知っている誰かかしら・・・」

「・・・」

「実は結構身近とか・・・」

「・・・」

「ああ、まあ、もう・・・まあ、でもね・・・サスキア・・・」

たまりかねたようにカリスがサスキアに向かって話だした。

「もうそろそろいいんじゃない？あなただってもう立派な看護婦よ？
婦長だって、もう何処にだしても恥ずかしくないって言っていたわ」

「どつという事かしら？」

扇子で顔を仰ぎながらシルヴィアは言った。何か事情がありそうだ
ということも察したがそれがわからない。とりあえず、茶化すよう
なことはもうやめていた。

「奥様、この娘はうちで引き取る前は孤児院にいたんです」

「それは伺ったことはあるけど・・・」

「その孤児院で一緒にいた男の子の影響で看護婦になりたいってず
っと頑張ってきたの」

「なるほど・・・ん？」

「まあ、たぶん、ご想像の通り・・・」

「って・・・ひょっとして・・・」

シルヴィアは大きく目を見開いた。

「ひょっとして・・・ヤン？」

耳たぶが破裂するんじゃないかというぐらい、サスキアは首筋まで真っ赤になった。

「まあ、そういう事で・・・」

「って、今まで何度でも会おうと思えば・・・ヤンが来ているときに限ってパーティにも顔を出さなかったじゃないの。サスキアさんは・・・」

「自分が一人前になるまであわないって言うものだから・・・」

ふう・・・と、シルヴィアはため息を付いた。

「なるほど・・・でも、さっきカリスも言っていたけど、そろそろいいんじゃないかしら？」と言っても、カイパー博士と旅に出ているからいつ帰ってくるものかさっぱりなんだけど」

「ねえ、そろそろいいんじゃない。会ってみても」

カリスも勧めてみた。

「え・・・あの・・・ヤンはもう有名なお医者さんだし、私はまだまだ目の前の仕事をこなすだけで精一杯だし・・・」

「こんなに何でもできる娘はいないって婦長が言ってたわよ」

「でも・・・ヤンはもう一流のお医者様だから・・・」

「そんなこと言っていたら・・・」

「それに、お姉さまの方が婚期を逃しそうで心配です」

「なっ・・・」

サスキアは急に反撃の方法を思いついたらしい。

「ふふ・・・ほんと血が繋がっていないというわりには、そっくりな姉妹ですこと」

「奥様っ！」

「カリスだつて、その気になればいつだつてスタンジェ先生にご紹介することはできるのよ？」

「いや、だつて・・・まだまだただの一介の産科医で・・・」

「だからサスキアさんと一緒にそんなこと言っていたら何時まで経つても・・・」

「ああ、そうだ、まず医者としての仕事をやりつくしてからにしたいですわ」

「じゃあ、どこまでやったらやりつくしたことになるのよ・・・」
「う・・・」

カリスは少し考え込んだ。顔は真っ赤である。

「ああ、ええ・・・たとえば・・・そうそう、診療所の所長になったり、中央医局からスカウトが来るくらいになってからにしたいんですの」

「そんなこと言っていたらそれこそ婚期を逃すわよ。今の所長さんが就任したのだつて四十を過ぎてからでしょ？」

長い間この話題で話し込んだが、結局カリスもサスキアも煮詰まらないままだった。しかし、カリスの言った条件は予想より早く満たされ、ついでにサスキアも姉の話ではぐらかすことはできなくなってしまうのである。

が、それはまだ先のことである。

アメルダムの花々カリスとサスキアその2々（後書き）

若干・・・エロっぽい話とかが入ってしまった・・・しかもどっちか
というと下品な感じに・・・。

本編、『不死騎』や新連載『ヴェスタラ戦記』もよろしく願います！

若鷹の飛翔〜ジェローン・ルワーズ〜 その1

父親が死んだ。

少年にとっては厳しくも寛大な父親だった。

没落貴族の娘との間に自分をもうけながら、姉と同様に愛してくれた。母が亡くなった後も、自分を長男として立派に育ててくれたのは父であった。これほどの男は他にいないと思っている。

だが、周囲にとっては違っていた。ルワーズ公国歴代で最も重大な問題を残して死んだ君主、それが少年の父、ジョージ・ルワーズへの評価であったのだ。

ルワーズ公国はヨルパ大陸でもきわめて特殊な成り立ちの国である。公を君主としていた国は他にもいくらかもある。多くは王号を用いる大国に従属しているが、ルワーズの場合は二つの王国、フリツプ王国とインテグラ王国の双方に封ぜられていた。

そもそもルワーズ公国はスカーディナヴィア半島から進行してきたノルマ人に対して、フリツプ国王が伯爵位を与えてこの地に封じたのが始まりである。よって、初期のルワーズはフリツプ国内の伯爵領でしかなかったのだが、ルワーズ伯爵家の野心家クアナトの登場により状況が一変した。大陸から程近い大ブリッツ島に進行、その地にインテグラ王国を築いた彼は、その後相次ぐ兄達の死により、ルワーズ伯爵位をも次いだのである。

ここに極めて奇形的な二つの王国の関係が生まれた。インテグラ王国は形式上、フリップ王国とは同格の王国であるが、インテグラ王はフリップ王国の臣下であるルワーズ伯爵を兼ねていると言うことである。結果、フリップ王国内でのルワーズ伯爵はインテグラ王国の巨大な領土を背景にその勢力を著しく強め、巻き返しを図ったフリップ王家との間に100年及ぶ戦争を招いた。

戦争の結果、両国が等しく痛手を負い、和平という英断にたどり着くまで無数の人名を失った。やっとたどり着いた結論がルワーズ公国の建国である。両者の最大の対立点は、ルワーズ伯爵領の帰属であった。

そこで、両者の中間に位置するこの地を半独立させ、その君主を両国から共同で任命することで決着したのである。ルワーズ公爵を継承する者はフリップ、インテグラ両王家の血を受け継ぐものでなければならず、一世代ごとに両国の王家と婚姻関係を結ぶこととなった。

ジョージ・ルワーズが残した問題。そして、ジェローン・ルワーズ自身が乗り越えなければならぬ問題がここにある。ジェローン・ルワーズの母にはインテグラ・フリップ両王家どちらの血も受け継がれていないのである。

姉、ファムケ・ルワーズの母はフリップ王家から迎えられた女性であったが、そもそもジェローンは愛人の子、庶子でしかない。姉はフリップ王家に嫁ぎ、息子も生まれた。フリップ王家ではそのジェローンの甥、アルベルトをルワーズ公にしようとしているが、それではインテグラ王国が納得しない。かと言って、インテグラ王国がジェローンを支持してくれるわけでもなく、自体は泥沼の状態であった。

午後、目の前にいる人物は自分の家庭教師である。未だ公爵位の継承も正確には決まらない自分の行く末について任された公国の重臣ベルト・ファン・レオニーが連れて来た人物である。レオニー伯自身の書記官を兼ねているという女性はシルヴィア・ファン・フェルメールと言った。

「殿下、インテグラ王国では寡婦に対する領地と爵位の継承権がこのほど認められることとなりました。フリップ王国では認められておりませんので、こちらの方が進んでいる考えられますが、この制度に未だ不足な部分を指摘するとしたら、どのような点でしょうか？」

シルヴィアは若い。まだ二十代のはずで、かつ、公国一を噂される美形であり、極めて洗練された貴族としての礼節と教養、名門伯爵家の爵位、男性なら若くして國務卿にまで上り詰めたであろう言われる明晰な頭脳の持ち主である。

「継承権が寡婦に限定されている点ではなかるうか。たとえば、亡くなつた前当主に娘がいて、それとは別に後妻がいた場合、継承できるのは後妻だけになってしまう。状況次第では娘が継承したほうがうまくいく場合もあるだろう。あなたのように・・・」

ジェローンはシルヴィアの授業をいつも楽しみにしていた。聡明なこの女性の授業は常に具体的であり、政治や経済、法律への関心を掻き立ててくれる。これほどの人物が女性であるという理由で、正式な形で公国政府機関に任官できないという点に矛盾を感じていた。

「ご指摘の点はそのとおりです。が、確かに私はフェルメール家の当主という肩書きを持ってはおりますが、ルワーズでも女性の爵位継承が認められているわけではありません。現在、フェルメール伯爵家は存在し、当主として私の名前が挙げられておりますが、伯爵位そのものは形式上空位。伯爵家の財産と領地は親族の共同管理という形をとっております。実際のところ、形式的にはともかく運用の実態としてはインテグラ王国よりも進んでいるという状態ではあります」

実際のところ、フェルメール家ではシルヴィアの継承について揉めなかったわけではない。亡父の遺言があつたとは言え、女性であるということは大きな問題であつた。だが、シルヴィアの極めて優れた素養と、もう一人の候補者である従兄弟のアントンの謙虚さが平和裏に議論を決着させたのである。

「法律は明確に示すことができる規範です。しかし、ありとあらゆる細かいことまで法律で定められるわけではありませんから、その点は運用しだいということになります。司法の厳格さという意味ではインテグラ王国の制度は極めて進んでおりますが、運用の実態という面を見ればルワーズの方が進んでいる面もあるということです」

ジェローンは何度もうなづきながら熱心にシルヴィアの話聞いています。この優れた素質を持つ少年は真綿が水を吸うかのごとく、シルヴィアの英知を吸収していく。

シルヴィアはジェローンの素質を惜しんでいた。このままでは次代のルワーズ公爵はフリップ王国側の主張に沿って、この土地に住んでも住んですらいらないアルベルトに決まってしまう。それもあまり穏やかな話ではなく、両王国の中間に位置するルワーズを戦場として武力によって結論を出すということがどうしても避けられそうも

ない。

結果、アルベルトの即位となれば、ジェロームは邪魔者でしかないのだ。殺害される可能性も低いとはいえない。シルヴィアはいざとなればインテグラ王国か隣国スペルファに亡命する手はずを整える必要もあると考えていた。

「さて、そろそろ時間ですので、今日はこれまでにしましょう」

残念そうな顔で見送るジェロームに背中を向け、シルヴィアは部屋を出た。この後は別の仕事が彼女を待っている。

「少しお疲れだったのではないかな？シルヴィア殿」

弱いランプの光だけの薄暗い部屋。ベッドの上に横たわった全裸の偉丈夫が、肌掛けに包まっただけの女に話しかけた。

「今日は少し忙しかったので。でも、お気になさらないで。それよりも・・・二人のときは呼び捨てにするのが、約束だったはずよ。それとも私もファン・バステン卿とおよびしたほうがよろしいのかしら？」

大きなやわらかい乳房を押し付けるように男の胸板に乗せながら、シルヴィアは口付けをした。

「これは失礼。最近は何かと堅苦しい連中と会う機会が増えたものでね」

「気楽な副隊長から部隊長にまで昇格すると、どうしてもそうなり

ますわね」

「気位ばかり高くて扱いにくい部下の相手もしないとならないしな。君以外の高位貴族を相手にするのは気疲れが多い」

シルヴィアはくすりと笑って、体を起こし、男の上に跨った。

「嘘ばかり。貴族の権威なんて気にしてすらいないでしょう？そうじゃないと嫌いになっちゃうんだから」

そう言って、二人は今晚三度目の悦楽に浸り始めた。

男の名はウィレム・ファン・バステン。公国の軍事力を象徴する護国騎士団の第一部隊長に就任したばかりの男である。ファン・バステン家は公国有数の武門ではあるが、爵位は段爵位で高くはない。公国軍においては、軍の上層部は高位の貴族によって固められているが、例外的に男爵位で兵団長の地位にまで上ったのが、彼の父、マーティン・ファン・バステンである。

長男であるウィレムは父親の意向通りに兵団ではなく騎士団に入った。兵団は歩兵を中心とした部隊編成で多くは平民の兵士で固められる。対して騎士団は士官のみならず、兵士も貴族出身が多くを占める。父親が兵団長であったとはいえ、騎士団において若くして部隊長の地位にウィレムが昇進するのは極めて珍しいことであった。

「また、群盗の討伐指令でもできれば、虚飾にまみれた面倒なパーティなんかには顔を出さずに済むんだけどな」

「あら、そしたら私とも会えなくなるじゃないの」

「ああ、そこが悩ましいところだね」

二人の行為はまだ続いている。ウイレムはシルヴィアの乳房を弄び、体を激しく動かしたまま、会話を続けていた。

「マルコ卿もすっかり部隊になじんだみたいね。お父上は最初は喜んでいたけど、最近はおなたに人格的影響を受けすぎないか心配されているようよ」

マルコとは、ウイレムの上司である護国騎士団長トーマス・ファン・ピケの息子である。放蕩息子の彼を更正させるための荒療治として、トーマスは型破りで有名なウイレムの部下として騎士団に息子を入団させた。

軽い性格と軟弱さは相変わらずだが、ウイレムに厳しく鍛えられ、最近では以前ほど問題を起こさなくなっている。取り巻きの不良少年たちも最近でまともに仕事に就き始めた。就職に関してはシルヴィアが友人を通じて世話したりもしている。もともと、マルコの酔った上での乱行に関しては、ウイレムの方が遙かに激しく、悪い手本の天然素材として大きく役立つたのではないかとシルヴィアは思っている。

「そうだ、明日には弟が帰ってくる」

「あら、カイパー博士のご一行がお戻りになるの？」

ピクリ、と一瞬だけシルヴィアは動きを止めた。少しだけ意外なことであったのだ。すぐに再び動き出す。

「中央医局の呼び出しらしい。南方のいくつかの州でスペルファ熱の流行の兆しがあるとか」

「ああ、それなら私の耳にも入っているわ」

「対処法についてカイパー博士とマウリッツに相談したいのだから」

治療法は確立されているんだから、わざわざ流浪の名医を呼び出す必要もないと思うんだがね」

「医術の問題というよりも、決断力の問題ね。医師不足だそうだけど、医学院の研究生を活用すればどうにかなる範囲のはず。わかっているけど、言い出して問題がでたら自分の責任になるから、博士の勧めがあつたつてことにしたいのよ」

「そういうことだ・・・なっ！」

ウィレムは一気に体を起こして、シルヴィアを押し倒すように覆いかぶさった。

「明日はいつ着くのわからないが、三人がアメルダムにいるうち宴会でも開きたいな」

「何かにつけて飲みたがっているだけという気もするけれど・・・」
激しく攻め立てられながら、シルヴィアはウィレムの首にしがみつき、ささやくように答える。

「そういえば、屋敷の庭の花がいま見所なのよ。お花見つてことにして、昼間にやりましょう。カリスも誘うわ。ああ、義妹サスキアさんも十三になったつて言うし、そろそろパーティに出てみてもいいじゃないかしら・・・」

「すっかり酒量を君にコントロールされているな。しかし、君の周りには美しいご令嬢ばかりで、庭の花も恥らつてしぼんでしまっているじゃないかね？」

「あら・・・そんな目で私の友人たちを見ているのかしら？」
「いっつ・・・」

シルヴィアはウィレムの尻の皮を思い切りつねった。

ウィレム・ファン・バステンとシルヴィア・ファン・フェルメールの交際はすでに公国の社交界でも公然のこととなっている。爵位や家格の違いから道ならぬ恋との批判もあったが、結局のところ、シルヴィアにそのような忠告ができるものもおらず、二人も周囲には気遣っているのです、それほど問題にはならなかった。

しいて言うなら、以前からシルヴィアに好意を寄せていたという若い貴族からの嫉妬をウィレムが一手に引き受けることになったことぐらいで、それもほとんどの貴族はあきらめていった。さまざまな嫌がらせや中傷がばら撒かれることがあったものの、そんなことを気にするような男でもなく、直接的にウィレムに喧嘩を売れるような度胸のある者もない。

「ファン・ダルファー閣下はアルベルト殿下の推戴を主張されているのですか？」

上司である國務卿テオ・ファン・ダルファー侯爵に対して厳しい詰問口調で問いかけたのは、國務府主席参事官、つまり公国政府機関の頂点に立つ國務府のナンバーツーであるベルト・ファン・レオニ伯爵であった。

「そこまでは言うておらぬ。先君の遺言がある以上、我々はそれに従うべきだが、と言ってもフリップ王家の意向を完全に無視することもできぬ・・・簡単に結論など出せぬわっ！」

ベルトは苦虫を噛み潰したような顔をしている。こうなることは十年前、ジョージ・ルワーズがジェローンを後継者に定めた時点でわ

かっていたことなのだ。その間、何も考えずにずるずると時を過ごしていた上司を、ベルトは無能と考えていた。

ベルト・ファン・レオニーは元々名門伯爵家の出身ではあるが、彼が家督を継いだ時点では、没落貴族の烙印が押されていた。彼の父親がそれほど多くもない家財をすべて使い切り、借金を残して死んでいったためである。ベルトはマイナスからスタートした人生を、自分の才覚だけで違うものに変えてきた。わずかの間に政治家としての頭角を現し、異数の出世を遂げたのである。

その彼から見れば、公国筆頭侯爵家に生まれ育ったテオ・ファン・ダルファーは家柄だけの無能な人物であった。年齢は自分より高いが、時折、子供をしついたりあやすようなつもりで相手をしないといけない。情緒不安定極まりないのだ。

結局、何の裏りのない口論の末、ベルトは國務卿の執務室を出た。

國務府内には、高級貴族を中心とした、ファン・ダルファー派と若手で家柄の低い者達を中心としたファン・レオニー派の二つの派閥が存在している。ファン・ダルファー派の連中は基本的にまともに働けない。実質的にこの国の最高機関を動かしているのはファン・レオニー派の者達なのだが、名目上はテオが政権を握っている。普段は何も考えずに機械のごとく書類をサインするだけの自分つがいざと言うときになると、そのサインをすることすらできなくなる。目の上のたんこぶと言うよりもたんなる邪魔者というのが、ベルトにとってのテオであった。

自分の執務室に戻ったベルトは、そこにいた自分の書記官に話しかけた。

「シルヴィア君、どうやらこのままでは戦争になる……」

自分への嘲笑を含んだため息を吐きながら、椅子腰掛けた。

「はい。それは避けられないと存じます」

「私は先君よりジェローン殿下のことを任されているが、この国自体を守ることができなければ、殿下の身も危うい。すでに半年がたとうと言うのに、次代の国公は定まらず、両王家も痺れを切らしてある……いつまでこの国があるものか……ファン・ダルファー閣下は自分の立場と言うのももわかっておられない……」

シルヴィアは上司の愚痴を聞きながら、顔を上げずに仕事を続けていた。

「君の才能を国に生かすために書記官に招いたが、私自身がこれだけ無力だと、返って申し訳なかったと思う……」

この一言で、シルヴィアは顔を上げた。

「そこまで弱気な発言は閣下にはお似合いになりません。少し疲れおいでなのではありませんか？」

「はは……これは少し愚痴っぽくなりすぎたな……」

「門閥貴族が家名だけで高位の役職にあるところを、実力だけでここまで這い上がって、最近では國務卿よりも主席参事官である閣下を頼りにしている人たちが多くなってきております。まだ、思い通りには行かなくとも、いずれは、この国を背負って立つのは閣下しかありません。お疲れのようでしたら、少しお休みでもとられませんか？」

ファン・レオニーは驚いた顔をした。

「そんなに疲れているように見えるかね？」

「ええ。ただ、お休みを取られても、悶々と仕事のことを考えていては意味がありませんね。なにか気晴らしをしてみたいかがですか？ああ、実は今度、私の屋敷の庭で花の鑑賞会を兼ねたパーティーを開きます。よろしければレオニー閣下もいかがですか？友人同士の気軽な集まりですが」

「若い人たちの集まりに私のようなものが混ぜられても気まずいだけではないかね？」

気乗りしない表情のファン・レオニー。花は嫌いではない。と言うよりも花は首都アメルダムを中心とする地域の主要産業で、花に関心のないものが高貴地位につくことは難しいと言われるほどだ。老若男女、貴賤を問わず生活の一部として花を楽しむのが、アメルダム市民には当たり前のことであった。

「家柄や地位に気を使う人たちではありませんから。それに、名医として有名なヨアヒム・カイパー博士やマウリッツ・スタンジエ医師も参加されますから、面白い話が聞けるかもしれません」

「ほほう・・・そう言えばファン・バステン卿はマウリッツ・スタンジエ医師と進行が深かったな。弟君もカイパー博士に師事しているとか」

シルヴィアは顔を赤らめた。上司にも噂が耳に入っている。とがめだてする様子もないが、やはり気恥ずかしい。

「はい。今回はご一行が無事アメルダムにお帰りになったお祝いも兼ねておりますので。ファン・フェルメール家もカイパー博士とは縁がございますから」

「なるほど。では、お邪魔させていただくでしょう」

こうして、数日後、ファン・フェルメール邸での鑑賞会のゲストとして、国務府首席参事官ベルト・ファン・レオニーが加わることとなった。

若鷹の飛翔〜ジェローン・ルワーズ〜 その1 (後書き)

半年も寝かせてしまった連載をまた起こす。
なんだか申し訳ない感じが・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6213/>

ルワーズ公国異才伝～不死騎外伝～

2011年8月26日16時04分発行